
少女の番号

旗 元彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女の番号

【コード】

N1914G

【作者名】

旗 元彦

【あらすじ】

綾子は元彼に追いかけて横断地下歩道に逃げ込むと男に出会った。

たぶん、地方大会の帰りだったとして、とにかく夕方と水色の空を越えて、少し暗くなった頃だった。竹刀袋を背負い、ブレザーの制服の下に青いジャージを着て、首に赤子猫みたいにやさしいマフラーという格好で歩いていた。試合後に送迎バスで家のかなり近くの家具屋のビル前まで送ってもらい、遡ってその前日だったかもしれないし、耳に押しつけたアメリカの女性歌手の歌を口で再生していたし、きつとあなたの想像のとおりでいいと思う。

私は個人的に勝ったけどうちの剣道チームは試合に負けたわけだし、ついでにあなたは電車の床にできた底の浅い海に浮かぶ人になった、（念のため、こういった現象は私の感情を一切表してませんので）そして天候は雨が降りそうで悪い、電車の車両は周囲をコンクリートで固められて閉鎖されてしまい、対戦相手の胸を打つ瞬間の私の気合の入った声をあなたに聞いてもらいたかったほどだ。奥に目をやればどこまでも繋がった無限の車両の列は、長い長い車両のなかにできた底の浅い海を連結して彼方の消失点へ去っていく、それはたとえば電車のなかで降っている雨でもいい。雨は現実に降っていてもいい、雨は私の膝頭に届くまで溜まってきているとしよう。それで、活気のない装飾だけはごてごて残った地元の商店街の歩道に入った。

で、普段、私はわざと不機嫌な顔をして道を歩いています。

すると、眼に眩しくてもはや何色なのか判別できないようなコーデインイトが酒屋を曲がってこちらに歩いてきた。ヤツの表情からしてヤツだっってこつちを見たくないようで、私は急に地面に関心もないのに観察しだして視線を合わせないようにした。この前別れた元彼が全身紫色という、最初、皇居の警備員が香港の偽パニコレクションの開催最中に歩いてきたのかと思ったくらい、私はコイツのこんな私服を見たことがなかったので、元彼とは二年間一緒だった

し、びつくりした、というか呆れた。まるで指先で髪をつねるような無痛覚具合に私達は何事もなくすれ違った。

質屋と裁縫屋と歌唱教室が入ったよくわからない古いビルの前の軒先に気休めに身を寄せたときだった。私は竹刀袋を掴まれて後ろに引かれ、振り返ると元彼のJの手がゆっくりと戻って逃げていき、Jはズボンに片手を突っ込むと足を広げて、ビルの軒先にあっただカイ七福神の陶器の置物に黙って触れていた。降り始めの小雨が私の唇に飛びついてきた。

不思議とJを睨んでいてもJの件は切り出されなかった。

どうしたの、って、訊ねてあげた。まるで遊園地の迷子の子どもに、私しか構ってあげるようなのは居ないんだ、なんて、あなたと一緒に迷子センターのある事務所に、親子みたいによその子ども両脇に立って三人で手を繋いで行くんだ、って感じに。小動物の死骸を目撃したような気分になってヨリがどうかではないみたいで、もう仕方なくて、もし、ヨリを戻したいとしても、日頃の能天気さ加減は消えうせていて、今日のJはひどく陰気じゃない？ 私の不機嫌な顔はなんだかわからないくらい突っ張って混乱していた。

追加に、

「どうしたんだよ」と私は言った。

「別に」とJは言った。

「なに？」

「試合どうだった？」

「別に」

「聞いてんじゃん」

「それだけなら行くから」

「止せよ、雨降ってるぞ」

Jは万歳をするように両手を上げた。

「バカじゃないの、ちよっと降ってるだけじゃん」

「行くなよ、頼むから、俺、お前に借りてたアルバム返し忘れててな」

「やるよ。いらねー」

(あなたは単なる同情じゃなかった)まるで自分の大事なものが誰かによって遠慮なく手に取られた感じ、どうせ数千円のことだし、貸したことをまったく忘れるような曲達はとうだつてよかった。それより他人が見た今の私は惨めで不恰好になつていないかと心配して怖かった。走りながらアルバムをJに貸したりしたのかどうか考えていた。あなたは私と一緒にそんなことをするのは許せないと憤つたりしてくれたりしたよね。だつて走る準備はまったくできていなかったし。

「待てよ!」

「ついて来んな!」

商店街の街路の脇に穴を開いた横断地下歩道を目指して走った。ここを抜けて四車線道路の向こうに行けば家まですぐだ。階段を五段飛ばして横断地下歩道に降りていった。背中の荷物はガチャガチャと上下に宙に舞い、湿った靴底は魔法をかけたように滑つたりしない、横断地下歩道の地下のホームに着くと私は斜めに体を傾けて短い曲がり角を曲がり、「待てよ!」というJの声をまた聞いて、「フザケンナヨ!」と顎を引いて叫んだ。

地下歩道に居た男に怒りの視線を投げられて私は思わず立ち止まつてしまった。他人の怒りにうまく反応する前に射抜かれたように硬直して(あまりに理想的に対処しなければならぬといった自己イメージが、かえって私の身体をマヌケにするようです)、ひどく不安に落ち着かなく、後から自分の怒りに取り残されてしまう、あなたに話した姿そのままの私なんだ。怒った表情の男はハワイの浜辺からやってきました、といった感じに短パンとビーチサンダルを履き、Tシャツの上に紺色のジャケットを着ていた、ジャケットのボタンは真鍮で錨マークを模ったものだった。

私の顔を睨んで、

「フザケンナ? おい、わかるだろ、殺人鬼だよ」と男は言った。

「待てよ!」

地上で私を探しているふうに、Jの声は案外遠かった。私が思ったより近くまで追いかけてくるのに時間がかかるみたいだった。

「殺人鬼。わかる？ 殺人鬼、これマードー」

男は私に腹を立て、同時に、壁に殺人鬼の落書きを描き続けた。それは子どもを描くような次元の絵でしかなかったけど、ギャブル好きの住所不定者みたいな男は、ホームの床に広げた新聞紙の上の黒いバケツ一杯の墨汁に、上半身を屈ませて持っていた毛筆を沈めた。

「ごめん、悪かった」

男は謝ると筆をはなした。

「さいきん、描いてるんだ。明日は脚立を持ってきて上部にかからないとな」

上半身を起こして骨盤に乾いた墨で汚れた両手を置いた、そのせいでジャケツトに手の跡と指紋がついた。彼は値札のついた精肉みたいに私をじつくりと、どんな色の女として外見が目立っているのか、すばやく眼球を動かした。

「いいとこだったんだけどな」

「待てよ！」

私は振り返らなかった。しかしJが階段を降りて横断地下歩道の入り口辺りまで降りてきたことは、男が私越しに私のやってきた方向を覗いたのでわかった。Jの声だつてさっきに比べるとずいぶん近かつたし、声は地下の音響効果で他人になつた私を叱るように呼ぶのだ。

「こつちに来いよ！」

「知ってる子？」

「知らないんですか？」

「俺が？ さあ」男は整つた無精ヒゲを右手で撫でてJを見た。

「もしかして後ろにいるの紫ですか」

「綾子、こつちに来いよ！」

「うん、紫。君がこつちに来てやれよ！」

男が声を出すとJの苛ついた声は止んだ。

「おい！ 君、来てくれよ！」

「止めてください！」と私は言った。

「いや、絵を観てもらいたくてさ、君は、綾子ちゃん、っていうの？ は、観てくれないしさ」

私は他人に自分の名前を前歯と奥歯で噛むように口から出されると恥ずかしくなります。

「綾子、っていうな。あいつ、ホントムカツク。あんたもだよ！」

「俺が？ じゃあ、アヤちゃん、どうだこの絵？ どう思うかな」

「Jは思い出したように私を呼んだ。」

「綾子、こつちに来いよ！」

「あー、うるせえ、いいかげんにして！ 絵、でしょ、これね、この絵を観ればいいの？ アンタ、マジ、あいつ追っ払ってよ！」

私は両方の耳を人差し指で塞いで彼の絵に近づいた。あなたは同じように耳の聴覚を捨て去ってくれることができる。（同じようにいま耳を塞いでます？）結局、私は開いた傘を握っていて（あなたのために握っていたことにします）、その状態で手に持った傘の下で耳を塞いで絵を覗き込むことになった。

「おい、アヤちゃんが、帰ってくれってさ」

「綾子、こつちに来いよ！」

「アヤちゃんは君に帰って欲しいんだよ」うん、その通りだ。

「綾子、こつちに来いよ！」

彼とJは私に向けて言ったようだった。

「わからんヤツだなあ」

「こつちだって、こつち！」

私は彼に報告をしていた。

ここにある絵、殺人鬼ってわけ？ なんだか黒が灰色に薄らいだり濃い黒に戻ったり、黒なのかやっぱり別の灰色かわかんない液体をぶつけて、もう液体じゃないのかも、乾いてかたまってるし、なんだろ、人がどこにいるのかもわからない。ああ、手なの？ でも

棒みたいなの先に棘がたくさんあってあなたの眉毛みたい、いや指関節に生えたつばい毛。あと、段階にわかれた色具合は、あなたの手のひらを手のひらで触ったように暖かい気持ちがある。きつとこのなかの、どこにいるかわからないけど、殺人鬼っていう人は人間なんだ。追われてる、自分は犯人じゃないけどたいへんなことになって、苦しんで、恨んで恨んで、本当に殺してやりたいぐらいなのに、ぐっと、暗いなかで、神経を巡らせて探ってる。ここに広がった、まぶたの裏の光を感じて明るい気持ちがあるけど、届かない場所、どこまでもありそうな広さ。そういったなかでの墨、一色のいろあいの複雑さに騙されて、ひとの叫びがそういった振幅に掻き消されてしまう（同時にあなたはいなくなってしまい、（どこにいます（さつき（家に（友達同士のあいだで嫌なトラブルがあって喧嘩につき合わされた）帰り、家族と話すと自分の部屋で）ケータイをいじってましたよね）？）目を瞑ったわたしは（そうじゃないように）あなたをこころで呼ぶほかない）。また、場所は、ひとに抱きつこうとしてる、誰もが離れていったのに、場所は墨で、そうやって、たくさん糸をひとに伝えて殺人鬼だけ殺人鬼の誕生を殺人鬼にならないように、遠く辛い曲線を描いた流れで……。でもそんなことじゃないのかも。ほんとうは違った動きなのかも、これを生んだ過去が絶望的なスピードでひとや場所にもがいて、離れ離れになるなにかをめぐめて暴れてるのかも、墨の線が手前にあったり奥にあったり、おぼろげに空気が進んで退いて来るような、だから話し合えるのに抱き合えない距離感で、お互いどうともなりそんなのに、ひとつも生きた感じがしない、っていう、建物で始まった隠れた囁き泣きみたいな運動が響いてくる。

気づいたとき彼は私の隣で一緒になって、私と殺人鬼の墨の絵を眺めていた。彼は地下歩道の冷たいタイルの床にしゃがみこんで、私の傘の下について入り込んでいた。私が注意をすると、彼はできるだけこうやって感想がでてくる視線で聞いてみたかったんだ、と言った。

「そうか」と彼は言った。

彼は両手を指揮者みたいに踊らせて喜んだ。

そして、動きを止めて、時が止まったように私の竹刀袋を凝視した。

「Jの声が消えていたので、振り返るとJは

すでにどこにもいなかった。

「あの子、上に行つて帰つちやつたよ、……君、剣道やつてんの？

次に試合があつたら応援に行くよ。俺、すぐやる気がでてるんだ。大学卒業する最後に、頼まれた絵を描いたら、ちよつとボラァンティアっぽい活動なんだよ、金だつてもらつてなくて、うん、絵を止めようかと思つてたけど、やつぱりやるよ、俺」

そこで、十分だけ、居残つたけれども彼は「アヤちゃん」とは呼んでくれなかった。

彼は汚れたジャケットのポケットの両手を入れて、殺人鬼の絵に向かつて軽く頷き、バケツの墨汁を筆で勢いよく充分に右にまわして取り出した。

名前を知らない男はまた殺人鬼の絵を描き始めた。「明日は脚立がいるぞ」と彼は言った。

私は不思議と疲れてしまつていて夢中に作業する彼を置いて（私は誰かの邪魔になりたくないひとなんだ。あなたもそういつたところがある）、傘を差してJが帰つたのとは別の、私の家の方向にあるほうの、地下歩道内を目指して歩いていった。

階段を上がり、外に出ると、いまやたくさん水滴が強く地面に落とされていて、予め、靴の底に詰めて用意しておいた傘を差し（前に握っていたのはあなたにあげました。知らなかつたでしょうけど）、私の腕は雨粒を濡らす為に、しばらく、私を濡らし続けていた。もし、あなたが感じてくれるなら、傘を天井の空に向けて遠ざけた私がそこに居たり、居なかつたりする。

町のタイル張りの地面に四角形が置かれていた。四角形の穴は地面の奥に進んでいて、斜めに階段をつくと真横に歩道を忍ばせていた。それが対称的に配置されてしまうと、四角形の穴は入り口に

なり、地面の奥は地下になり、歩道は横断地下歩道として完成してしまう。しかし、入り口は出口でもあるし、地下歩道のなかを飛ぶツバメも居て、真横も縦であり、奥は手前にやってきて、階段はすでにエスカレーターになっていた。大雨の日は地下歩道は浸水してしまう。同じ日、地下歩道内の天井のツバメの巣が落ちてしまい、ツバメの子らは波に乗って出かけていく。遮るはずの階段は滝のように地上に雨水を排出していて、それで旅に出かけていくのだ。

あなたはもうコンクリート塊のなかの底の浅い海に浮かんで流れて奥に行き過ぎたのだ。そのせいで、なにも見えないようです。すぐ捕まえなかつたせいだ。私は底の浅い海とコンクリートと雨を頼りにして電車に乗ります。でも、あの日の試合を限りに部活を引退して、道場に顔を出すくらいで剣道を止めちゃった私には剣道の試合とか縁がなくなつたわけだ。

電車は横断地下歩道には止まらない、そういつたシリアスな事情があるみたいですね。

こういつたことで、

ちょっときついですが、

元気じゃないです。

いつも、

あなたの絵を眺めています。

画家の名前がどこにもないのは悔しいけど、たぶん、完成したんだ。

あの日、

私は感じたいものをあなたに感じていました。そういつたことは違う、あなたに会える日を楽しみにしています。

(後書き)

『数を少女に』の続きのような短編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1914g/>

少女の番号

2010年10月8日15時09分発行